

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖 神 共 始

なきことばわがすくいのためえに
 言 吾 救 爲

どうていぢょよりうまれしものをほめうとて
 童 貞 女 生 者 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼおりしをしのびそのこ光
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまあえばなあり。
 復 活 給

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
 全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
 三 者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す 、

せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
 成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に な ん ぢ を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 な ん ぢ は は じ め わ が く に に お い て お の
 爾 初 我 國 於 己

れ を が い ら い し ゃ と し り た れ ど も 、 ハ リ ス ト ス の
 外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈

たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 復活のコンダク 第5調 】

いまもいつもよよにい、アミン。
 今 何 時 世 世

わがきゅうせいしゅ、ひとをあいするしゅ
 我 救 世 主 人 愛 主

よ、なんぢはぢごくにくだあり、ぜん
 爾 地 獄 降 全

のうしゃとしてそのもんをやぶり、ぞう
 能 者 其 門 壊 造

せいしゅとしいて、ししやおのれとともに
 成主 死者 己 借
 せいかつせしめ、しのはりをくじき
 復活 死 刺 折
 アダムをのろいよりときたまえり。ゆえに
 詛 釋 給 故
 われらみなよぶ、しゅよ、われらをすくい
 我等 皆 呼 ぶ 主 我等 救
 たまあえ。

司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} セラフィムより讃榮せられ、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} ヘルヴィムより讃榮せられ、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 悉くの天軍より伏拝せられ、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 萬物を無より有となし、^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} 人を爾の像と肖とに依りて造り、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 爾が諸の賜を以て之を飾り、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 願う者に智慧と明悟とを與え、^{を せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} 罪を行う者を棄てずして、^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 其救の爲に痛悔を立て、^{を せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、^{生 神 女 と 古 世 より 爾 の 喜 を 爲 し し 諸 聖 人 と の 祈 禱 に 依 り て な り、)} 此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主しゅの名に依りて來たる者きものは崇め讃めらる、ヘルヴィムあがほに座する者ぎものよ、爾なんぢは其國そのくに
 の光榮こうえいの寶座ほうざに在りて恒つねに崇め讃めらる、今いまも何時いつも世よよに、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第5調 】

司祭) 慎つつしみて聽きくべし、衆人しゅうじんに平安へいあん、

誦經) 爾なんぢの神しんにも、

司祭) 睿智えいち、

誦經) プロキメン、主しゅよ、爾なんぢは我等われらを保たもち、我等われらを護まもりて、斯この世よより永えいえん遠いたに至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよおよりえいえんにいい
 斯 世 永 遠 至
 たらん。

誦經) 主しゅよ、我われを救すくい給たまえ、蓋けだしぎじん義人たは絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよよよりえいえんにいい
 斯 世 永 遠 至



た ら ん。

誦經) ^{しゅ なんぢ われら たも われら まも}主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、



このよおよ り えい えんにいい たらん。
斯 世 永 遠 至

【 使徒經 (アポストロス) 170 端 コリント後書1章21節~2章4節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ こうしょ よみ}聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き}謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい われら なんぢら とも けんご およ われら あぶら もの かみ}兄弟よ、我等を爾等と偕にハリストスに堅固にし、及び我等に膏つけし者は神な

^{かれ われら いん かつしん へいし われら こころ あた われかみ よ わ たましい}り、彼は我等に印し、且神の聘質を我等の心に與えたり。我神を籲びて我が靈の

^{しょうしゃ な われいま いた いた なんぢら ゆうじょ ゆえ こ}證者と爲す、我今に至るまでコリントに至らざりしは、爾等を宥恕するが故なり。此

^{われら なんぢら しん しゅ あら すなわちなんぢら よろこび たす けだしなんぢら しん もつ}れ我等は爾等の信に主たるに非ず、乃爾等の喜を助く、蓋爾等は信を以て

^{た われまたうれい もつ なんぢら いた みづか さだ けだしも われなんぢら うれ}立つなり。我復憂を以て爾等に至らざらんと自ら決めたり。蓋若し我爾等を憂

^{わ うれ もの ほか たれ われ よろこ わ しょ なんぢら たつ}いしめば、我が憂いしむる者の外、誰か我を喜ばしめん。我が書して爾等に達せしは

^{すなわちこれ われきた とき われ よろこ もの よ うれい う ため けだし}即是なり、我來る時、我を喜ばしむべき者に由りて、憂を受けざらん爲なり、蓋

^{われ なんぢしゅう おい わ よろこび なんぢしゅう よろこび しん われおおい かなしみ こころ}我は爾衆に於て、我が喜は爾衆の喜なりと信ず。我大なる哀と心の

^{いたみ よ おお なみだ もつ なんぢら しょ なんぢら うれ ため あら すなわち}痛とに縁りて、多くの涙を以て爾等に書せり、爾等を憂いしめん爲に非ず、乃

^{わ なんぢら お あい ふか し ため}我が爾等に於ける愛の深きを知らしめん爲なり。

(比較用 口語訳)

あなたがたと共にわたしたちを、キリストのうちに堅くささえ、油をそそいで下さったのは、神である。神はまた、わたしたちに証印をおし、その保証として、わたしたちの心に御靈を賜ったのである。わたしは自分の魂をかけ、神を証人に呼び求めて言うが、わたしがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに対して寛大でありたいためである。わたしたちは、あなたがたの信仰を支配する者ではなく、あなたがたの喜びのために共に働いている者にすぎない。あなたがたは、信仰に堅く立っているからで

ある。そこでわたしは、あなたがたの所に再び悲しみをもって行くことはすまいと、決心したのである。もしあなたがたを悲しませるとすれば、わたしが悲しませているその人以外に、だれがわたしを喜ばせてくれるのか。このような事を書いたのは、わたしが行く時、わたしを喜ばせてくれるはずの人々から、悲しい思いをさせられたくないためである。わたし自身の喜びはあなたがた全体の喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからである。わたしは大きな患難と心の憂いの中から、多くの涙をもってあなたがたに書きおくれた。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、あなたがたに對してあふれるばかりにいただいているわたしの愛を、知ってもらうためであった。

【 アリルイヤ 主日第5調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ った} 主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世に爾の眞實を傳えん、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた} 蓋我言、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 89 端 22 章 1~14 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 主は左の譬を設けて曰えり、天國は其子の爲に婚筵を設けたる君王の如し。彼其

諸僕を遣して、召されし者を婚筵に招きたれども、彼等來るを欲せざりき。又他の僕

を遣して曰えり、召されし者に告げて云え、視よ、我已に餐を具え、我が牛と肥えたる

畜と已に宰りて、一切備われり、婚筵に來れ。然れども彼等は顧みずして、或者は

其田に、或者は其貿易に往けり、余の者は彼の諸僕を執え、辱しめて、之を殺せり。

王を聞きて怒り、其軍を遣して、彼の兇人を滅し、彼等の邑を燬けり。時に彼

そのしよぼく い こんえんそな め もの た ゆえ なんぢらちまた ゆ あ
 其 諸 僕に謂う、婚 筵 備わりたれども、召されし 者は堪えず、故に 爾 等通衢に往きて、遇
 わん者を 悉 く婚 筵に招け。其 僕 途に出でて、凡 そ遇いたる 者、悪しきと善きとを問わ
 ず、之を集めれば、婚 筵に席坐する 者満ちたり。王は席坐する 者を觀ん爲に入りて、彼處
 ひとり こんれい ふく き もの み これ い とも なんぢなん こんれい ふく き
 に一人の婚 禮の服を衣ざる 者あるを見て、之に謂う、友よ、 爾 何ぞ婚 禮の服を衣ずし
 ここ い かれもくねん そのときおう えきしゃ い かれ てあし しば かれ と
 て此に入りたる、彼 黙 然たり。其 時 王は役 者に謂えり、彼の手足を縛りて、彼を取り
 そと くらやみ とう かしこ なき はがみ けだしめ もの おお えら
 て、外の幽 暗に投ぜよ、彼處に哀哭と切齒とあらん。蓋 召されたる 者は多けれども、選ば
 れたる 者 は 少 し。

(比較用 口語訳)

イエスはまた、譬で彼らに語って言われた、「天国は、ひとりの王がその王子のために、婚宴を催すよう
 なものである。王はその僕たちをつかわして、この婚宴に招かれていた人たちを呼ばせたが、その人た
 ちはこようとはしなかった。そこでまた、ほかの僕たちをつかわして言った、『招かれた人たちに言いな
 さい。食事の用意ができました。牛も肥えた獣もほふられて、すべての用意ができました。さあ、婚宴
 においでください』。しかし、彼らは知らぬ顔をして、ひとり自分の畑に、ひとり自分の商売に出て
 行き、またほかの人々は、この僕たちをつかまえて侮辱を加えた上、殺してしまった。そこで王は立腹
 し、軍隊を送ってそれらの人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。それから僕たちに言った、『婚宴
 の用意はできているが、招かれていたのは、ふさわしくない人々であった。だから、町の大通りに出て
 行って、出会った人はだれでも婚宴に連れてきなさい』。そこで、僕たちは道に出て行って、出会う人は、
 悪人でも善人でもみな集めてきたので、婚宴の席は客でいっぱいになった。王は客を迎えようとして
 はいってきたが、そこに礼服をつけていないひとりの人を見て、彼に言った、『友よ、どうしてあなたは礼
 服をつけないで、ここにはいつてきたのですか』。しかし、彼は黙っていた。そこで、王はそばの者たち
 に言った、『この者の手足をしばって、外の暗やみにほうり出せ。そこで泣き叫んだり、歯がみをしたり
 するであろう』。招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀3 (金口イオアン) へ

重連禱に加えるコロナ終息とウクライナの平和の為の祈り

こ まち こ きょうかい およそ まち ぜんせかい えきびょう まんえん まも わ ぜん
此の都邑と此の 教 會、凡 の都邑と全世界とが疫 病 の蔓延より護られ、我が善に
ひと あい かみ じんじ あいれん た およ われら のぞ いかり とど そのわれら
して人を愛する神が仁慈と哀憐とを垂れて凡そ我等に臨む 怒 を遏め、其我等に
せま ぎ ばつ われら すく およ われら あわれ ため いの
逼る義なる罰より我等を救い、及び我等を 憐 むが爲に禱る、

また お たたかい よ そのいのち うしな もの ため しゅわれら かみ あわれみ
又ウクライナに於ける 戦 に因りて其生命を 失 いし者の爲、主我等の神が 憐
もつ かれら かえり やまい かなしみ おわり いのち ところ やす
を以て彼等を 顧 み、疾 も 悲 もなくして、終 なき生命のある 處 に安んぜしめ
ため しゅ いの
んが爲に主に禱らん、

また お たたかい よ くるしみ あ きず う うれ あるい うつ もの
又ウクライナに於ける 戦 に因りて 苦 に遇い、傷を受け、憂い、或 は徙されし者
じれん せいめい へいあん そうけん きうしょく たま ため いの
に慈憐、生命、平安、壮健、救 贖 を賜わんが爲に禱る、

また たい こうせん とど かしこ わぼく へいあん さか ため なんぢ いの
又ウクライナに対する攻 戦 を止め、彼處に和睦と平安との 榮えんが爲に 爾 に禱る、
き い あわれ
聆き納れて 憐 めよ、